

琉球大学学術リポジトリ

インターネットで英語を学ぶ : English Central,
iKnow!, Busuu.comに見るオンライン教材の可能性

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科 (欧米系) 公開日: 2015-08-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東矢, 光代, 植竹, 亜紀子, Toya, Mitsuyo, Uetake, Akiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002007955

インターネットで英語を学ぶ

— English Central, iKnow!, Busuu.com に見るオンライン教材の可能性¹—

東矢光代・植竹亜紀子²

0. はじめに

企業のグローバル化や旅行・仕事での人の移動、さらには情報ツールを介した英語でのコミュニケーション需要はここ数年、増加傾向にある（転職サイト DODA 資料, 2013/10/30 閲覧）。そのような中で自らの英語能力を高めようとする日本人学習者の数も増加傾向にあることが、TOEIC テスト受験者数の推移（TOEIC 公式サイト, 2013/10/30 閲覧）からも読み取ることができ、また書店には資格試験対策図書を筆頭に、英語学習用の図書教材が数多く陳列されている。その一方で人々の生活の中にはインターネットが深く入り込み、パソコンやスマートフォンを主とする情報機器の利用は、もはや常識となってしまう感がある。このような生活スタイルの中で、日進月歩の技術の向上を背景としつつ、オンラインの英語教材もめざましく変化している印象が否めない。そこで本稿では、インターネット上の本格的な学習サイトとして、「English Central」「iKnow!」「Busuu.com」の3つを取り上げ、その3つに見られる英語学習効率化への工夫と、それらの特徴と外国語習得理論との関連性について述べていく。

1. English Central (<http://ja.englishcentral.com/>)

English Central のサイトを開くと、多くのビデオクリップ（以下、動画）のサムネイル一覧が目を引く。利用者（以下、学習者）は提供されている多くの英語による動画から、自身の興味とレベルに合った動画を選択し、学習を開

始することができる。学習は3つの基本的なステップ(「見る」、「学ぶ」、「話す」)から構成されており、まず「見る」では、画像を見ながら英語音声聞く。必要に応じて何度でも再生でき、また「字幕を見る」／「見ない」の選択ができる。次の「学ぶ」では、動画内のセリフを聞き、表示された字幕の空欄に入る単語を入力することが求められる。入力が正しければ○、間違いなら×が表示された後、単語の意味、用法が表示され、ネイティブによる発音の流れ、内容を確認することができる。そして最後の「話す」では、動画内のセリフの一部をマイクに向かって発音し、自分の声を録音する。発音にエラーがまったく見つからなかった場合は緑色、発音的な間違いが疑われる場合は黄色、システムが単語をまったく聞き取れなかった場合は赤色で単語が表示される。また不自然な間があった場合は赤く"P"の表示、単語と単語の間に不要な発音があった場合は、"! "と表示するなど、の細かいフィードバックが画面に表示される。最終的に総合点として、その動画クリップに対する学習者の得点とレベル評価が出るが、全ての単語が緑(エラーなし)の表示になるまでは、スキップしない限り先に進まない。その時の発音も点数化して表示されるという特徴がある。

動画による学習とは別に、それにリンクした単語学習のモードも English Central には装備されている。コース、動画に出てきた単語は自動的に「マイ単語」というページにリストアップされ、重点的に単語学習を行なうことができる。単語学習は「見る」「話す」「学ぶ」の3ステップで構成されており、習得度を評価する「クイズ」も準備されている。「見る」では、ビデオで単語を5回見る/聞く活動、「話す」では動画リストで、単語を5回発話練習、そして「学ぶ」では単語学習アプリで、5回繰り返し学習を行なう。そしてクイズにおいて、英語→日本語/日本語→英語/英語→英語の確認テスト全てに正解できた時点で、その単語が習得されたと見なされる。「マイ単語」の中で既に知っている単語はクイズに出題しない設定も可能である。また自分が目標とする、あるいは興味のあるテスト形式の種類を IELTS、TOFEL、TOCIC、CEFR から選択し、それぞれの指標の目標点数(レベル)に見合った単語のみを表示させることも可能である。

その他の機能として、My English ページという学習状況管理機能が挙げら

れる。ここには学習したコース、動画が、学習の進捗状況、学んだ単語数、発音の上達度などが、自動的に記録・表示される。そのため学習者が自らの学習履歴を管理したり、目標を立てスケジュール管理していくことが可能である。

一見、さまざまな動画の集合体にしか見えない English Central だが、大量の動画をうまく組み合わせることにより、多様な学習者のレベルと興味に対応できる。

TOEFL、TOEIC 等の試験を目指す場合には、テストの種類とレベルに応じたプログラム、語彙が選択できるなど、不要なものを省き、必要なものだけに焦点を当てて学ぶことも可能である。英語による映画や興味のある動画などを理解したい場合、実際のスピーチ、映画、アニメなどから一部抜粋した動画を教材として使用していくことで、様々なジャンル、様々な話し手の中英語をナチュラルスピードで理解できることが見込まれる。会話力をつけたい学習者対象には、さまざまなジャンル、シーンに合わせたコースが豊富に準備されている。聞いたものを真似て発話するだけでなく、自分の発話したものに対し発音、スピード、間の取り方など細かくフィードバックが受けられる。

2. iKnow! (<http://iknow.jp/>)

English Central がバラエティに富んだ数多くの動画から、自らが学習する動画を選択して学習を積み重ねていく方法を主としているのに対し、iKnow! は教材を目的・目標に合った「コース」として設定している。そのため、学習の進め方としてはまず、自分の目標にあったコースを選ぶことが求められる。英語のコースは以下の6つである。

① 英会話マスター 4000

英語で日常生活を送る上で不可欠な、使用頻度の高い語句や表現をインプットし、語彙力の基礎を固めることを目的としている。内容は英会話マスター 500・4000、実践編の9つに分かれており、はじめにコース診断結果により、その学習者のレディネスに見合ったコースが、おすすめとして表示される。

② ビジネス英語

オフィスにおける基本的なコミュニケーション、交渉、プレゼンで役立つ高度な英語表現といった、それぞれの目的に合わせた様々な語彙をインプットすることが目的である。サブコースはビジネス英語入門～上級(3レベル)、オフィス・コミュニケーション、ニュース英語の5つである。

③ 旅行・趣味

趣味の分野で活用できる語彙、英語表現の習得を目的とし、「旅行の英会話」「動物の英語」「セクシー英会話」「名作映画で学ぶ英語」「偉人たちの名スピーチ」「スポーツの英語」の6つのサブコースがある。

④ TOEIC

TOEICの目標スコアごとに、リスニング、リーディング頻出の重要語句をインプットできる。サブコースは「600点を目指せ!」「800点を目指せ!」の2つである。

⑤ 留学準備

英語圏への留学に必要な資格試験のスコアアップにつながる語彙を習得するコースで、さらに「TOEFL基礎/リスニング/リーディング対策」「SAT対策」「GRE Verbalセクション対策」「GMAT Verbalセクション対策」「GRE & GMAT Mathセクション対策」の7つに分かれる。

⑥ 大学受験

センター入試、大学入試に頻出の単語やフレーズをカバーしており、「センター入試頻出単語」「国公立2次・難関私大入試対策」の2つのサブコースが用意されている。

以上のように教材は学習者の目標に応じてかなりの広範囲にわたり、サブカテゴリーを合わせると、トータルで200以上のコースがある。学習者はそれらの中から、学習予定教材を「フォーカス」として上限20コースまで設定する。すると、学習目標や進み具合に沿って、自分で設定したそれぞれのコースの学習の時期が表示される仕組みになっている。例えば、一週間の学習ターゲット時間を設定すると、その1週間分の学習した時間と残り時間が表示される。またカレンダーには、その日の学習時間、週ごと、月ごとの学習時間と学習履歴が表示される。

実際の学習活動の中身としては、「アプリ」と呼ばれる3つの学習モードがあり、それぞれのアプリでステップに沿って学習を進める。まず1つめの「iknow! アプリ」は、単語やセンテンスを効率よくインプットすることを目標とする。最初に学習すべき語彙とその意味が文字と音声で提示される。次に、画面に表示された英単語の意味を5つの選択肢から1つ選ぶ作業、発音された英単語（文字なし）の意味を5つの選択肢から1つ選ぶ作業、そして画面に表示された日本語の意味を持つ英単語を5つの選択肢から1つ選ぶ作業を行なう。そして最後にディクテーションが課され、間違えた項目は再度表示される。コースの学習が終わると学習者は、学習状況（学んだ単語、習得状況、学習時間）が確認できる。

次の「Dictation アプリ」は、音声を聞き、空欄に熟語を補充する、リスニング強化のためのアプリである。どうしても聞き取れない場合は、ヒントボタンを押すことで、熟語の一部が表示され、学習を継続できる。スペル間違いの箇所は赤で表示され、正しく補充できた場合は、正しい文章が音声と文字と写真（その状況を示す画像）で提示されるようになっている。またコースが終わるごとに、学んだ単語数・学習時間・○正解数/△ミスの数/×不正解数が表示される。

3つめの「BrainSpeed アプリ」は、「ゲーム感覚で英語の瞬発力を鍛える」という説明がついているが、キャラクターが飛んでいく中で、そのコースで学習した単語に関するクイズ（英語→日本語/日本語→英語）が2択で出題されるゲームである。正しい答えを選択すると、キャラクターが上に向かって進んでいけるのだが、間違った答えを選択したり、答えの選択に時間がかかるとキャラクターはどんどん下に下がっていき、地面に着いたらゲームオーバーである。ゲーム終了時には、解答結果とスコア、そして結果に応じたバッジが表示される。解答結果は正解数（○）、1回だけ間違えたもの（△）、2回以上間違えたもの（×）、スコアは1分あたりの回答数、連続正解数、および正解率がフィードバックされる。

また iKnow! には iKnow Live という別料金の実践練習コースも設けられており、Skype を通じて、登録インストラクターと「フリーカンパセーション」

か「コースに沿ったレッスン」タイプの会話練習ができる。レッスン提供時間は朝10:00～深夜1:00まで、1回のレッスン時間は25分で、一週間に3回まで利用できるようである。レッスン終了後には、ボキャブラリー／文法／リスニング／発音／レッスン姿勢／補足フィードバックについて、それぞれ5段階表示のフィードバック、及びそれらを合わせた総合評価と、コメントをインストラクターからもらうことができる。

3. Busuu.com (<http://www.busuu.com/ja/>)

Busuu.comは、「会話・コミュニケーションに特化した学習がしたい人、英語母語話者と直接やり取りをしたり、友達がほしい人（サイトの説明より）」を対象としており、ヨーロッパ共通参照枠（CEFR）に基づき、初級（A1 / A2）、中級（B1 / B2）の4レベルに区分されている。一番目につく特徴は、トップページで自分の現在の学習状況についてビジュアルで確認ができる点であり、学習が進めば進むほど、「語学ガーデン」の中の木や植物が育ったり、動物が出現する。逆に、復習クイズで間違った回答をすると、「間違い虫」がガーデンに侵入してくるなど、学習状況の把握にゲーム性を持たせている。また、「コースエリア」には終了済み・未終了のユニット、及び現在の学習進度によって次に学ぶべき単語や文法を含むコースが表示され、それに従い学習を進めていくことができる。さらに、その時々で学習できる学習ユニットを「カタログ」として、一覧表示できる機能がある。

コースは通常の英語のコースに加え、ビジネスコース、トラベルコース（有料）があり、学習ユニットは「単語」「会話文」「筆記練習」「ブストーク」「音声録音練習」「復習」の5つのステップで構成されている。まず「単語」では、重要単語と用例が表示され、文字、音声で意味の確認を行なった後、クイズにより理解度を確認する。次の「会話文」では、表示された会話のダイアログを見ながら会話文を聞いていく。そして「筆記練習」では、質問に対する答えの文章を入力し、他のユーザーに添削してもらうことができる。特記事項として、Busuu.comに登録する際は、自分が学習している（学習を希望する）言語と

母語（あるいは機能できる言語）を自己申告することになっている。このことにより、学習者としての参加とは別に、学習を助ける立場として関わることもできるのである。そのため「筆記練習」に続き、「ブストーク」においても、ビデオチャット機能を利用して、予め登録されているネイティブスピーカーと会話練習をすることや、「音声録音練習」において自分の発話を録音し、ネイティブスピーカーに添削してもらうことも可能になる。そして「復習」では、そのユニットで学んだ単語やフレーズがクイズ形式で出題される。ただし有料の機能が多く、無償参加で学習できる部分が少ない。

4. 教材のデザインと外国語習得理論

以上、3つの英語学習サイトを見てきたが、オンライン学習教材プログラムとして、いくつかの共通点が見られる。まず1つめは、多様な情報入力・出力方法の採用である。電子情報端末の高性能化、オンライン処理の高速化・多量化、そして対費用効果の向上に伴い、動画（視覚情報）と音声（聴覚情報）を自然な形で提供するとともに、学習者の入力を処理できるようになったことで、学習教材に複数の情報モードを容易に組み込むことが可能になっている。English Centralは膨大な数と種類の動画を提供し、学習者の文字入力の正誤処理、音声入力の評価までできるようになっている。iKnow!でも学習語彙の音声、画像、文字を組み合わせた提示や、学習者の入力を要する Dictation 活動が取り入れられており、有料オプションとして Skype を通じた音声でのやりとりの機会も設定されている。Busuu.comでも文字と音声の提示が多用されており、学習者による文字入力にも対応している。また母語話者や上級話者との音声コミュニケーションの機会、自らの発話を録音してフィードバックを得る機能が準備されている。

次に、学習者のレベルと興味に応じた教材および学習スケジュールの選択が可能になっており、同時に自らの学習を管理・プロデュースする機能が備わっている。3つのサイトとも、自らのレベルを様々な客観指標（資格試験など）で認識させ、目標を意識させることによって、現時点とゴールとの間に取り組

むべき学習を「コース」や「サブコース」、あるいは「学習活動」の選択に置き換えるという明確な手法を取っている。またその学習内容を効率的に進めていくためのカレンダー機能の提供、学習履歴の記録、次のステップでの推薦教材の提示なども、サイトの中に組み込まれている。

それに関連して、3つめに、学習ステップやサブコース同士の自動リンクもパソコンを使った教材ならではの機能と言えよう。例えば English Central では動画での学習を中心にしながらも、そこで学習した単語が自動的に蓄積され、別途学習できる単語学習フェーズへと進むことができる。iKnow! でもアプリ同士が連関することで、学習者は同じ内容や苦手とする項目について、異なる切り口で繰り返し学習することができる。このため学習者は、同じものを学習していても挫折感が少なく、飽きずに繰り返し学習を継続できるという利点がある。

4つめの共通点として、パソコンを利用した教材ならではの即時評価・フィードバック機能が挙げられる。クイズ形式での単語学習における、選択肢の正誤フィードバックや、ディクテーション入力でのフィードバック、また English Central では評価基準に則した発音のフィードバックも学習者に返される。これらは機械による即時フィードバックであり、学習を促進すると考えられる。

さらにオンライン教材ならではのゲーム性を取り入れたデザインも見られる。iKnow! の BrainSpeed アプリでは、単語学習クイズに鳥のようなキャラクターの動きを取り入れていて、学習に楽しさと緊張感を生み出しているし、Busuu.com の学習進捗状況に連動したガーデンのデザインも、自らの状況を把握するわかりやすい工夫だと言えよう。

最後に特筆すべきは、母語話者との交流など、オンラインの向こう側にある他者との関係性の構築である。電子メールを始め、Skype などのインターネット機能は空間・時間の制約を超えた交流を可能にしたが、それを利用しているのが iKnow! の母語話者との会話練習、Busuu.com の他のユーザーとの交流である。特に英語を実際に使う機会が限られている日本の学習環境においては、直接の交流体験は英会話教室や仕事でのやりとり、個人的な交流などがなければ、母語話者と直接英語を介したコミュニケーションを行なう機会は限られて

いた。しかし iKnow! や Busuu.com などのオンラインプログラムにおいては、ビデオを通して、いろいろな背景を持つ母語話者と実際のコミュニケーションを取ることで、様々な特徴をもつことばに触れることも可能になった。たとえオンラインであっても、実在する相手との交流による個人間でのやりとりを行なうことは、感情の起伏を促し、学習への意欲を高めると同時に、習得にも肯定的な影響を与えると考えられる。

このように English Central、iKnow!、Busuu.com は、オンラインの特性を生かした英語学習教材であると言えるが、外国語習得理論の見地からも、効果的な外国語学習が見込まれることが予測される。まず、これらの教材による学習により、自らのレベルとニーズに応じた、かなりの量のインプットを得ることができる（インプット理論、Krashen, 1982）。一例を取っても、English Central では豊富な動画のデータベースに加え、4 億語の英語コーパス分析に基づき難易度別、ジャンル別、目的別に分類された語彙を選定しており、自身のレベル、目的にあわせた学習ができる。

さらに Swain (1998) のアウトプット仮説によれば、習得の促進のためには理解可能なインプット (Krashen, 1982) を大量に受けることに加え、学習者にアウトプットの機会をできるだけ多く与える必要がある。また、自分が話す言語と目標言語とのギャップに気付いたり、フィードバックを受けたりすることが、適切な運用につながると言われている。例えば Busuu.com では自分の発話を録音し、確認できることに加え、文章の産出に関しても母語話者から直接フィードバックを受けたり、実際に会話の機会を持つことができることにより、言語運用が促進されることが期待できる。また English Central では、自分の発音と母語話者の発音を比較し、そのギャップに気づくことで、発音技術の向上を目指すとしているが、これは Schmidt (1990) の Noticing Hypothesis に基づいていると言える。さらに English Central は、"STIM"s (statistically trained intelligibility models = 統計的に積み上げていく伝達度モデル) という独自の発音評価システムを開発し、一貫性を持った、信頼性の高いフィードバックを学習者に提供しているが、この機能により、個々の学習者は自身が持つ弱点を知り、適切な形を身につけていくことができるだろう。

言語の理解や産出のような情報処理が、意識しなくとも高速で行なわれるようになることを自動化と呼び、言語習得理論において2000年以降の重要なキーワードになっている。この自動化のためには一連の情報処理・行動が、高速化・無意識化されるまで「繰り返す」ことが必要である。リスニング、語彙学習、発話練習、すべて繰り返し学習が求められるが、これらのインターネット教材でも繰り返し言語内容・項目を学習させる工夫が認められる。特に苦手とする項目を蓄積し、復習・再学習を重点的に行なわせる機能は3つすべてに装備されている。English Centralでは、「脳科学に基づいたインターバル学習」として、Ebbinghaus (1885)、Leitner (1972)、Mondria (1994)、Pimsleur (1967)などの研究を援用しつつ、一定の間隔(インターバル)をあけた繰り返しが、多くの新単語を早く覚えるには効果的である、とサイトで述べている。また記憶の効率化のためにも、単語のみに焦点を当てるのではなく、文脈内で単語を習得するステップを取り入れていることがわかる。

第二言語習得における動機付けの重要性は広く認識されており(Cohen & Dörnyei, 2002; Ellis, 1994等)、特に「内発的動機づけ」は外国語習得の成功を大きく左右する要因の1つである。自分で課題を設定してそれを達成しようとするような状況においては自分が中心となって自発的に思考し、問題を解決するという自律性を発揮できる。また問題の解決によってもたらされる有能感も学習を進めていくうえでの、大きな動機づけとなり得る。3つのプログラムに備わっている学習状況の把握やスケジュール化を助ける機能は、学習者の自己決定を促し、やる気の継続につながることを期待される(自己決定理論, Deci & Ryan, 1987)。同じくEnglish Centralで、学習者が特定の興味対象テーマに焦点を当て、学習する動画を選択できることも、学習者の動機づけを高めると考えられる。また社会的関係の構築も内的動機づけに影響を与えるため、iKnow! およびBusuu.comでは母語話者と直接やりとりをする中で、自発的に思考したり、「話したい」という気持ちを持ったり、楽しさを感じたりする経験を得ることができるだろう。これらも高い内的動機付け、ひいては学習の継続につながることを予測できる。

Busuu.comでは、入力した文章の添削やチャット、Skypeなど、登録した

母語話者と比較的自然なコミュニケーションの機会が設けられている。Long (1996) は第2言語習得における「意味の交渉」の重要性を指摘した。それは、第二言語話者と母語話者が会話をしている際、お互いを理解するためにお互いの発言の意図をくみ取ろうとする努力と、持てる能力により相手にメッセージを伝えようとする行動、すなわちメッセージの共通理解をゴールとした意味交渉が行われ、そのとき学習者にとって理解可能なインプットが得られることが、第二言語の習得に必要である、という考え方であった。この理論に照らすと、Busuu.com の「チャット」機能において、様々な人と話すときには、自然の「インフォメーションギャップ」が存在し、それを埋めるために様々な手法（例えば理解の確認やリキャスト等）が試されることになる。このようなやりとりは、教室でのコミュニケーション活動とは異なったやり取りができるので、そこからコミュニケーション能力を伸ばすことができると考えられる。

さらに、このような双方向性のコミュニケーションにおいては、コミュニケーションストラテジー（以下、CS）の活用や習得も期待できる。Stern (1983) によると CS は、十分に習得していない第二言語で意思疎通をしようとする時に起こる種々のトラブルに対処する技術である。Busuu.com では参加者が「学習者」と「母語話者」の立場でオンラインコミュニケーションに参加するのだが、学習者の立場の場合、第二言語を十分に習得していないケースが多いことも予測される。そのような際、適切に CS を使用することで、効果的なコミュニケーションの方略を実践的に学び取ることができると考えられる。

5. まとめと展望

紙面の小テストを単にパソコン上に載せたような、機械的、一律的な CALL 教材が主流だった時代から、今回紹介した3つのサイトのように、今は、動画・音声・ゲーム・学習履歴などの様々な機能と、充実した教授内容をコンテンツとしたオンライン教材がネット上には存在している。それらは学習者を引き付け、学習に向かわせ、学習を効率的に達成させるような工夫に富んでおり、外国語習得理論に照らし合わせても、かなりの得た教材となっている。にもか

かわらず、先日英語文化専攻の昼間主3年次対象クラスでこの3つのサイトを紹介したときには、これらのサイトを知っている、あるいは使ったことがあると答えた学生は40名中、ほぼ皆無であった。インターネットにつながる窓口は、今やパソコンだけではなく、スマートフォンやiPadなどより手軽でモバイル性も高いものになった。その流れで行けば、学生の利用もインターネット上のサイトではなく、スマートフォンなどのアプリのほうに向かうのかもしれない。スマートフォンやiPadに対応する英語学習用のアプリの数も種類も、日々増え続けている。インターネット上にも今回研究対象とした3つのサイト以外にも、英語学習に資するサイトは存在する。今後さらに研究対象を広げ、多くの学習用サイトを調査するとともに、実際に利用してみたのメリット・デメリット、および効果検証実験まで進めていきたいと考える。

注

- 1 本研究は、琉球大学うない研究者支援センターによる研究補助員配置制度（平成25年度第1期）を利用した成果の一部である。
- 2 琉球大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程

引用文献

- Cohen, A.D., & Dörnyei, Z. (2002). Focus on the language learner: Motivation, styles, and strategies. In N. Schmitt (Ed.) *An introduction to applied linguistics*. London: Arnold pp.170-190.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (1987). The support of autonomy and the control of behavior. *Journal of personality and social psychology* 53(6): 1024-37.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon.

- Long, M.H. (1983). Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers. *Studies in Second Language Acquisition* 5, 177-93.
- Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11(2): 129-58.
- Stern, H.H. (1983). *Fundamental concepts of language teaching: Historical and interdisciplinary perspectives on applied linguistic research*. Oxford: Oxford University Press.
- Swain, M. (1988). Manipulating and completing content teaching maximize second language learning. *TESL Canada Journal* 6: 68-83.
- 転職サイト DODA (デューダ). (2012年5月21日). 「ホンネの転職白書: グローバル採用の実態調査 2012 - 企業が求める“英語力”とビジネスパーソンの“英語力”」 2013年10月30日 <http://doda.jp/guide/ranking/056.html> よりダウンロード.
- 転職サイト DODA (デューダ). (2013年7月22日). 「グローバル採用の実態調査 2013 - 転職に“英語力”は必要?」 2013年10月30日 <http://doda.jp/guide/saiyo/006.html> よりダウンロード.
- TOEIC 公式サイト. (2013年4月3日). プレスリリース記事「2012年度 TOEIC® プログラム受験者数は過去最高を更新」 2013年10月30日 <http://www.toeic.or.jp/press/2013/53.html> よりダウンロード.
- TOEIC 公式サイト. 公式資料「TOEIC テスト受験者数の推移」 2013年10月30日 http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/about/transition.pdf よりダウンロード.

謝 辞

本研究ノートの投稿にあたり、初稿を呉屋英樹先生に査読いただき、有益なコメントをいただきました。記して感謝いたします。しかし本ノートの不備な点と言うまでもなく、全て著者の責任にあることを申し添えます。

**Learning English online:
Features seen among EnglishCentral, iKnow!, and Busuu.com
in relation to L2 acquisition theories**

TOYA Mitsuyo UETAKE Akiko

This paper provides a brief summary of three internet sites for English learning, i.e., English Central, iKnow!, and Busuu.com, as well as a tentative evaluation based on L2 acquisition theories and approaches. There are common features observed such as: combination of different modes such as visual and aural/oral, listening-speaking-reading-writing; self-determination of level and contents based on learner's interests; automatic recording of learning histories and individualized learning phase; utilization of gaming concept while learning; and online communication with native speakers. The activities which the three learning sites indicated can be supported with well-known L2 acquisition theories/approaches, for example, Input theory, Output theory, Interaction hypothesis and automatization. A quick in-class survey revealed that these sites have not been well known among English-majoring juniors; however, such e-learning materials should be effectively utilized in order for them to attain good level of English proficiency.